

II 研究分担 および 研究経過

研究分担者は以下の通り。研究代表者の綿抜、廣木が共同研究の事務にあたって、もっぱら資料調査、翻刻およびテキストデータ作成の計画、実行を推進した。宗祇作品の収集に当たっては、奥田が『宗祇』（人物叢書 218、1998、吉川弘文館）の執筆資料となった宗祇作品年表控えを提供して、収集計画の基本を設定した。また、綿抜・廣木・奥田・伊藤・岸田は、その収集計画にしたがって資料の調査および作品の翻刻、研究にあたった。一方、本研究の基本となる連歌データのシステム開発においては、中山・宮脇が連絡を取り合いつつ、宮脇が早稲田システム開発株式会社システム部（担当：堀田敦士氏）と密な連絡をとってこれを推進した。

綿抜 豊昭	筑波大学・図書館情報学系・教授	研究の総括と資料調査・翻刻・作品研究
奥田 勲	聖心女子大学・文学部・教授	資料調査・翻刻・作品研究
廣木 一人	青山学院大学・文学部・教授	資料調査・翻刻・作品研究
伊藤 伸江	愛知県立大学・文学部・助教授	資料調査・翻刻・作品研究
岸田 依子	昭和女子大学・文学部・教授	資料調査・翻刻・作品研究
中山 伸一	筑波大学・図書館情報学系・教授	データの情報処理
宮脇 真彦	立正大学・文学部・助教授	データの情報処理および検索システムの構築

最初の年度は、研究全体の具体的計画の策定と基本調査を以下の要領で行った。

- ①全体計画のために研究代表者・分担者全体による会議。
- ②データベース化のためのシステム開発。
- ③資料収集および入力のための設備備品の準備。
- ④調査及び資料収集のために研究分担者は各地の図書館・文庫等への出張。
- ⑤収集した資料の分析評価を行い、テキストの選定・翻字。
- ⑥⑤で得た資料を②で策定したシステムに従って入力。

また、以下の研究調査はすべて研究代表者および研究分担者全体の合議・実行により行った。

まず、前記奥田による宗祇作品年表のリストの提供を受けて、それに各種の資料により宗祇の作品リストを作成しつつ、調査すべき作品とその順位を話し合った。その際、作品を次の 5 種類に分けて、それぞれについて調査すべき作品リストを作

成することとした。

- (1) 宗祇の一座した百韻・千句等の連歌作品
- (2) 句集・撰集に収録された宗祇の句
- (3) 連歌論・紀行・説話等に収録された宗祇の句
- (4) 宗祇の著作である連歌論・紀行
- (5) 宗祇の和歌

これは、調査のためばかりでなく、検索用のデータベース構築のための措置でもある。というのも、データベースの構築に当たっては、句索引と文章を対象とする索引との間にはシステムの大きな隔りがあり、ほとんどデータベースを別個に組み立てなくてはならないからである。

以下、検索用データベースのシステムの基本的な構想、ならびにそのイメージについて簡単に報告しておこう。

1) 作品の翻刻・データ入力

作品の翻刻に当たっては、データベース上で作品翻刻を示すことができるように工夫した。詳しくは、次ページ「作品翻刻・データ入力要領」によられたいが、あらかじめ CD-ROM という電子メディアによる作品集成を目的としたので、正確な作品の翻刻を目指したのは当然としても、検索システムに乗る形での翻刻が求められたわけである。そのため通常の翻刻に加えて、検索用の処理を施した作品翻刻ということとなり、単に翻刻するというよりも労力を要する結果となったのは致し方ないことであった。

*** 作品翻刻・データ入力要領 ***

- 1 百韻・千句・句集などのデータ入力は、エクセルファイルを用い、宗祇全集基本フォーマット.xls をコピーして行う。(黄色の箇所は書き換えない)
- 2 一作品、一ファイルとして、次の作業を行う。
 - ① ファイル名を付ける。ファイル名は、「成立年・賦物百韻」の形として、成立年を西暦で次のようにする。年次不明のばあいは、発句の上五で代用する。賦物不明は、省略。千句は、俳文学大辞典に載るものは、その見出し作品名で記入して、百韻毎にファイルを作成する。
例 寛正二年正月朔日賦何人連歌 ⇨ 1461.1.1 何人百韻.xls
秋の日も何山連歌 ⇨ 「秋の日も」何山百韻.xls
初瀬千句第一百韻 ⇨ 初瀬千句第一百韻.xls
 - ② 西暦月日見出しはすべての行にコピーする。
 - ③ 句番号、折・面、面内句番号は、指定のままに対応する本文を入力してゆく。この時、もし、夢想など発句に該当するものが複数句数ある場合は、句番号1の行を挿入して増やして対応する。
 - ④ 本文(青色部分)は、三句(五七五)に分けて記す。短句の場合は、最初の二句に記入する。本文は、おどり字を開く他は原文のままとする。
 - ⑤ ルビは、ひらがなの歴史的仮名遣いとし、濁点を付さない。
 - ⑥ 作者(本文表記)(青色部分)は、本文のままに記入。ルビも対応する読みを付す。
 - ⑦ 作者(同定用)は、校勘を加えての作者名を記入。連歌師は基本的に名前のみ。公卿、地下は、氏名により、官位を記さない。不明のものは、空欄とする。
 - ⑧ 最終行に、句上を記す。句上は、作者(本文表記)欄に、あるがままに記入する。ないものは空欄。
 - ⑨ 句上げのあるなしに関わらず、作者(同定用)に、句上げを作成する。作成手順は、百韻の作品がすべて記入済みであることを確認して、以下の順で行う。
(イ) 一巡の順に作者名を記入。
(ロ) データを作者の欄で並び替え、句数を数える。
(ハ) その結果を句数実数欄に記入する。
- 3 解説用シートの記入
 - ① 第一行に、諸本や諸資料から勘案して、知られうる正確と思われる情報をすべての項目について知られうる限り記入する。
 - ② 第二行目は、底本に記されている情報について、知られうる情報を記入。
 - ③ 諸本1～ は、それぞれの情報を記入する。
 - ④ 備考欄に、問題点などがあれば記入。

作品翻刻・データ入力用シート

*データは、三句索引を原則として、作成した。検索用には、統一的な表記を用

西暦月 日	見出し	句 番 号	折 面 内 句 番	本文1	ルビ1	本文2	ルビ2	本文3	ルビ3	作者(本文 表記)	作者ルビ1	作者(同定 用)	作者ルビ2	句 数 実 数
		1	1											
		2	1											
		3	1											
		4	1											
		5	1											
		6	1											
		7	1											
		8	1											
		9	2											
		10	2											
		11	2											
		12	2											
		13	2											
		14	2											
		15	2											
		16	2											
		17	2											
		18	2											
		19	2											
		20	2											
		21	2											
		22	2											
		23	3											
		24	3											
		25	3											
		26	3											
		27	3											
		28	3											
		29	3											
		30	3											
		93	8											
		94	8											
		95	8											
		96	8											
		97	8											
		98	8											
		99	8											
		100	8											
		司上												

いる必要があるための処置である。

*清濁の問題は、読みとも関わるので本来付すべきだと考えるが、作業の効率化を考え、また統一も考えて、あえて清濁を付さないこととした。

作品解題用シート

見出し 後注情報	所載書	題名(請求番号)	巻記	種別	原物	発行年	発行巻目	目的	目的ルビ	場所	場所ルビ	その他	その他ルビ	備考
原本														
請求1														
請求2														
請求3														

西暦月日	見出し	句番号	折・面	面内句番	本文1	ルビ1	本文2	ルビ2	本文3	ルビ3	作者(本文表記)	作者(同定用)
文明十二年九月八日	何人百韻	1	1	1	月にみつ	つきにみつ	夕塩寒し	ゆふしほさむし	秋の海	あきのうみ	宗祇	宗祇
文明十二年九月八日	何人百韻	2	1	2	風見え初る	かせみえそめる	薄霧の松	うすきりのまつ			忠国	忠国
文明十二年九月八日	何人百韻	3	1	3	山端は	やまのはは	時雨に近く	しくれにちかく	色付て	いろつきて	明猷	明猷
文明十二年九月八日	何人百韻	4	1	4	みやこ出れば	みやこいつれば	しらぬ行末	しらぬゆくすゑ			宗賀	宗賀
文明十二年九月八日	何人百韻	5	1	5	草枕	くさまくら	夢にも遠き	ゆめにもとほき	旅の空	たひのそら	良性	良性
文明十二年九月八日	何人百韻	6	1	6	夜深き空に	よふかきそらに	雁帰るこゑ	かりかへるこゑ			宗作	宗作
文明十二年九月八日	何人百韻	7	1	7	水くらき	みつくらき	霞を波や	かすみをなみや	越ぬらん	こえぬらむ	桂舜	桂舜
文明十二年九月八日	何人百韻	8	1	8	雲しつか成	くもしつかなる	春の川上	はるのかはかみ			宗歎	宗歎
文明十二年九月八日	何人百韻	9	2	1	ななめやる	ななめやる	夕の山に	ゆふへのやまに	鐘鳴て	かねなりて	興泰	興泰
文明十二年九月八日	何人百韻	10	2	2	入日残れる	いりひのこれる	野辺の遠方	のへのをちかた			千松丸	千松丸
文明十二年九月八日	何人百韻	11	2	3	幽成	かすかなる	まつの一むら	まつのひとむら	うちけふり	うちけふり	乗盛	乗盛
文明十二年九月八日	何人百韻	12	2	4	いつとも分ぬ	いつともわかぬ	佗人の庵	わひひとのいほ			祇	宗祇
文明十二年九月八日	何人百韻	13	2	5	露や身を	つゆやみを	秋なきとて	あきなきとも	しほらん	しほらむ	国	忠国
文明十二年九月八日	何人百韻	14	2	6	見し夜忘れぬ	みしよわすれぬ	面影の月	おもかけのつき			猷	明猷
文明十二年九月八日	何人百韻	15	2	7	暮毎の	くれことの	荻吹風に	をきふくかせに	尚恋し	なほこひし	歎	宗歎
文明十二年九月八日	何人百韻	16	2	8	おもひのたねよ	おもひのたねよ	誰かうへけむ	たれかうえけむ			性	良性
文明十二年九月八日	何人百韻	17	2	9	天地の	あまつちの	中に契を	なかにちきりを	むすひきて	むすひきて	祇	宗祇
文明十二年九月八日	何人百韻	18	2	10	山めくる日の	やまめくるひの	影のさやけさ	かけのさやけさ			賀	宗賀
文明十二年九月八日	何人百韻	19	2	11	鷺の飛	さきのとぶ	ふもとの小川	ふもとのおかわ	水遠く	みつとほく	作	宗作
文明十二年九月八日	何人百韻	20	2	12	むらのさかひに	むらのさかひに	高き青柳	たかきあをやき			宗祇	宗祇
文明十二年九月八日	何人百韻	21	2	13	尋行	たつねゆく	花はしるへも	はなはしるへも	またしらて	またしらて	宗親	宗親
文明十二年九月八日	何人百韻	22	2	14	かすみにくれぬ	かすみにくれぬ	あふ人も哉	あふひともかな			歎	宗歎

文明十二年九月八日	何人百韻	23	3	1	春雨の	はるさめの	名残の月 は	なごりのつ きは	さひしきに	さひしきに	賀	宗賀
文明十二年九月八日	何人百韻	24	3	2	ふるはなみ たか	ふるはなみ たか	袖の別路	そてのわか れち			舜	桂舜
文明十二年九月八日	何人百韻	25	3	3	鳴虫の	なくむしの	すす吹風 に	すすふくか せに	旅立て	たひたちて	祇	宗祇
文明十二年九月八日	何人百韻	26	3	4	夜寒のあし た	よさむのあ した	野へそ移ら ふ	のへそうつ ろふ			性	良性
文明十二年九月八日	何人百韻	27	3	5	秋更て	あきふけて	初霜白き	はつしもし ろき	草の戸に	くさのとに	歎	宗歎
文明十二年九月八日	何人百韻	28	3	6	住人さそな	すむひとさ そな	いにしへの 里	いにしへの さと			賀	宗賀
文明十二年九月八日	何人百韻	29	3	7	捨果る	すてはつる	身は唯安 し	みはたた やすし	山の奥	やまのおく	作	宗作
文明十二年九月八日	何人百韻	30	3	8	心からにそ	こころから にそ	つらき世も ある	つらきよも ある			国	忠国
文明十二年九月八日	何人百韻	31	3	9	何事を	なにことを	たのみつ 又は	たのみつ または	恨むらむ	うらむらむ	祇	宗祇
文明十二年九月八日	何人百韻	32	3	10	唯夢の間 の	たたゆめの まの	契とをしれ	ちきりとをし れ			歎	宗歎
文明十二年九月八日	何人百韻	33	3	11	佛の	おもかけの	残る斗を	のこるはか り	かたみに て	かたみに て	親	宗親
文明十二年九月八日	何人百韻	34	3	12	花なきみね に	はななきみ ねの	迷ふ白雲	まよふしら くも			歎	明歎
文明十二年九月八日	何人百韻	35	3	13	音よはき	おとよはき	松やあらし の	まつやあらし の	末の春	すゑのはる	舜	桂舜
文明十二年九月八日	何人百韻	36	3	14	よとまぬ年 の	よとまぬと しの	暮ぬるもう し	くれぬるも うし			賀	宗賀
文明十二年九月八日	何人百韻	37	4	1	身に速く	みにとほく	おもひしこ とよ	おもひしこ とよ	老の浪	おいのな み	祇	宗祇
文明十二年九月八日	何人百韻	38	4	2	薪とりつつ	たききとり つつ	掃るさの道	かへるさの みち			泰	興泰
文明十二年九月八日	何人百韻	39	4	3	降雪の	ふるゆきの	夕川小舟	ゆふかわ をふね	さし侘て	さしわひて	歎	宗歎
文明十二年九月八日	何人百韻	40	4	4	音せぬ袖 に	おとせぬそ てに	瀬とそ氷れ る	せとそこほ れる			性	良性
文明十二年九月八日	何人百韻	41	4	5	立寄て	たちよりて	涙みせは や	なみたみ せはや	妹か門	いもかかと	舜	桂舜
文明十二年九月八日	何人百韻	42	4	6	ちきらぬ月 に	ちきらぬつ きに	うかれこそ 行	うかれこそ ゆけ			親	宗親
文明十二年九月八日	何人百韻	43	4	7	おもひやる	おもひやる	心も秋の	こころもあ きの	山越て	やまこえて	歎	明歎
文明十二年九月八日	何人百韻	44	4	8	幾重の霧 に	いくへのき りに	鹿の鳴らん	しかのなく らむ			歎	宗歎
文明十二年九月八日	何人百韻	45	4	9	かつ朽る	かつくちる	木葉に寂 し	このはにさ ひし	雨の声	あめのごゑ	性	良性
文明十二年九月八日	何人百韻	46	4	10	檜皮埋るる	ひはたうつ もるる	昔の古寺	こけのふる てら			祇	宗祇

文明十二年九月八日	何人百韻	95	8	3	雪落る	ゆきおつる	垣ねは風や	かきねほかせや	渡るらむ	わたるらむ	賀	宗賀
文明十二年九月八日	何人百韻	96	8	4	軒端かさなる	のきはかさなる	山本の里	やまものさと			歌	宗歌
文明十二年九月八日	何人百韻	97	8	5	水のこゑ	みつのこゑ	花のしけ木を	はなのしけきを	舎にて	やとりにて	国	忠国
文明十二年九月八日	何人百韻	98	8	6	かすめる道に	かすめるみちに	しつか成暮	しつかなるくれ			作	宗作
文明十二年九月八日	何人百韻	99	8	7	人はみな	ひとはみな	帰るに遊ぶ	かへるにあそぶ	野への春	のへのはる	性	良性
文明十二年九月八日	何人百韻	100	8	8	千とせもかくや	ちとせもかくや	永日のかかけ	なかきひのかかけ			親	宗親

巻数	節立	句番号	前句付句番号	詞書	本文1	ルビ1	本文2	ルビ2	本文3	ルビ3	作者(岡定用)	作者(本文表記)
下草第十	発句	1267	0	正月二日春立待し年、待是院法印坊にし								
下草第十	発句	1267	1		朝霞	あさかずみ	きのふたちしや	きのふたちしや	去年の春	こそのはる		宗祇
下草第十	発句	1268	0	霞の発句中								
下草第十	発句	1268	1		たつとしも	たつとしも	見えぬやよもの	見えぬやよもの	朝霞	あさかずみ		宗祇
下草第十	発句	1269	0		見すもあらぬ	みすもあらぬ	とを山いく	とほやまいくへ	薄霞	うすかずみ		宗祇
下草第十	発句	1270	0	高雄尾崎坊の所望に								
下草第十	発句	1270	1		衣をる	ころもをる	霞もしろし	かずみもしろし	瀧のいと	たきのいと		宗祇
下草第十	発句	1271	0	おなしころを								
下草第十	発句	1271	1		我たちて	われたちて	きるやうす物	きるやうすもの	朝霞	あさかずみ		宗祇
下草第十	発句	1272	0	たか蕉の	たかふての		春の木すゑそ	はるのこすゑそ	朝かずみ	あさかずみ		宗祇
下草第十	発句	1273	0	水無瀬御廟法案に								
下草第十	発句	1273	1		霞ながら	ゆきながら	山もとかすむ	やまもとかすむ	ゆふへかな	ゆふへかな		宗祇
下草第十	発句	1274	0	残雪のころを								
下草第十	発句	1274	1		ひましろし	ひましろし	霞やすたれ	かすみやすたれ	暮の雪	みねのゆき		宗祇
下草第十	発句	1275	0	消やらて	きえやらて	花や友まて	はなやともまて	みねの雪	みねのゆき			宗祇
下草第十	発句	1276	0	かすむらし	かすむらし	今朝やはきえん	けさやはきえむ	暮の雪	みねのゆき			宗祇
下草第十	発句	1277	0	山や春	やまやはる	かすまぬかたの	かすまぬかたの	雪もなし	ゆきもなし			宗祇
下草第十	発句	1278	0	梅発句中								
下草第十	発句	1278	1		雪に梅	ゆきにむめ	やみはあやなき	やみはあやなき	にほひかな	にほひかな		宗祇
下草第十	発句	1279	0	たたのみか	たたのみか	此ころの風	このころのかせに	梅の華	むめのはな			宗祇
下草第十	発句	1280	0	梅いつく	むめいつく	袖はうつしの	そてはうつしの	にほひかな	にほひかな			宗祇
下草第十	発句	1281	0	山崎に知人の傍所にて								
下草第十	発句	1281	1		梅かかも	むめかかも	ありとやそての	ありとやそての	夕月夜	ゆふつきよ		宗祇
下草第十	発句	1282	0	おなし心を								
下草第十	発句	1282	1		手折など	たおりなど	袖にやにほふ	そてにやにほふ	梅の華	むめのはな		宗祇
下草第十	発句	1283	0	衆閑とて朋友の侍るか、草庵にして興行の会に								
下草第十	発句	1283	1		にほへ梅	にほへむめ	身にこそよその	みにこそよその	春の風	はるのかせ		宗祇
下草第十	発句	1284	0	志賀のわたりにて併し一座に								
下草第十	発句	1284	1		春はまつ	はるはまつ	梅や花その	むめやはなその	志賀浦	しかのうら		宗祇
下草第十	発句	1285	0	柳を								
下草第十	発句	1285	1		道芝の	みちしはの	朝霞はらふ	あさつゆはらふ	やなきかな	やなきかな		宗祇
下草第十	発句	1286	0	河内国正覚寺の障にして								
下草第十	発句	1286	1		青柳の	あをやきの	かつらきとをし	かつらきとをし	朝霞	あさかずみ		宗祇
下草第十	発句	1287	0	おなし所の会に								
下草第十	発句	1287	1		水霞	みつかすむ	春草にほふ	はるくさにほふ	つつみかな	つつみかな		宗祇
下草第十	発句	1288	0	住吉夢龍の時、春月を								
下草第十	発句	1288	1		夜るは月	よるはつき	さそすみの江の	さそすみのえの	夕霞	ゆふかずみ		宗祇

2) データベースのためのシステム構築

本データベースは、連歌の検索用プログラムとして、早稲田システム株式会社：堀田氏と綿密な打ち合わせに基づき、堀田氏のもとで一応の完成をみた。その詳細は、一括して堀田氏に報告してもらうこととするが、ここでは、そうしたプログラムを企画したそもそもの意図について、簡単にメモしておきたい。

以下、別掲の『データベース版宗祇全集』メモ(2000.4.28)を参照しつつ、お読みいただければ幸いである。これは、早稲田システムとの打ち合わせを進めつつ第2年目の第1回会議時に提出したものである。

基本的システム：

本データベースは、「宗祇全集」に基づいてその自在な検索に便ならしめるためのシステムであると同時に、より完璧な「宗祇全集」を作成するためのシステムでもある点に、その特色がある。というのも、連歌の作品は写本によって伝存するため、多くの古典作品と同じく、伝存する幾種かの写本の中でどの写本がもっともよい本文かという問題を抜きにしては、その本文を決定することが難しい。百韻・千句というまとまった作品に関しては、伝本を博搜して、それぞれ校異を施しつつ、もっともよい本文を求める方法が有効であろう。だが、連歌作品の場合、断簡として残っているものも多々あり、たとえば発句のみ、付句・付合のみという作品も少なくない。連歌論や撰集に採られているものはその最たるものである。それらがどの作品に初出したものか特定するには、百韻・千句のデータベースによる検索システムが必要なのである。したがって、これらを同時に行いつつ、「宗祇全集」を作成するわけであるが、そのためには、つねによい本文によって差し替えられるシステムが不可欠と考えた。そこで、基本画面には、現在のデータ入力済みの作品リストが一覧でき、その上、その作品リストをある程度「絞り込み」つつ、検索できるように考えたのである。

また、「絞り込み」は、「宗祇全集」のためばかりではない。連歌は、複数の連衆によって詠まれる共同作業の詩であるから、自ずから同時代の連衆を一覧することにもなり、連衆の作品一覧をも作成することが可能である。「絞り込み」は、そうした要請にも応えられるよう「人名検索」をも設けることとした。

画面1「絞り込み画面」～画面2「作品本文」：

これら各種の「絞り込み」において、現在集まっているデータが何件あるかを一覧したものが画面1である。それぞれの詳細は、作品リストとなって画面1-1に表示されることになる。作品リストから、画面2作品本文へという流れで、作品画

面が示される形を作ることが、本文の整理の仕方や、本文の参照の仕方を考えてスムーズであろうと考えた。

画面 3：検索画面

検索は、本システムの中心的機能である。大きく分けて、句検索（付句・発句の一句ごとの検索）、付合検索（前句と付句との検索）と、去嫌検索（○句去）とからなっている。初期の企画書には、句去機能は予定されていなかったが、最終的には○句去の言葉が引けるようなシステムとなっている。

付合検索は、連歌の特質を生かした検索法である。連歌は、前句と付句とを合わせていかなる世界が立ち上がってくるかを味わう文芸である。したがって、前句の言葉と付句の言葉とが互いに組み合わせあって、一句の時には思いもしなかった世界が出現する。とりわけ連歌は、和歌的世界を核として隣り合う二句が一つの世界を創出することが多い。前句の言葉と付句の言葉とが、ある和歌の伝統に響き、和歌を喚びだしてくるといってもいい。

付合の注釈をしているとき、痛感されるのは、隣り合う二句に立ち上がってくる和歌を探すのは、昨年バージョンアップして使いやすくなった『国歌大観』CDROMによって可能となった。しかし一方、連歌の伝統を探そうとすると、この二句にまたがっての使用状況を調べなくてはならなくなる。

隣り合う二句が、どのような組み合わせであろうとも、例えば「花」と「風」とをもっている場合を検索できるようなシステムを必要とするわけだ。なお言えば、「花」は、「はな」とも、また写本によっては「華」とも表記されている可能性がある。この「花」に関する三種類の表記を、もう一つの「風」（これも「かぜ」とも表記される可能性がある）とともに検索するようシステムを企画した。

「花」もしくは「華」もしくは「はな」
という言葉の集合と、

「風」もしくは「かぜ」

という言葉の集合とを共有する付合には、どのような付合があるかを検索しうるシステムがあれば、付合における言葉の伝統は探しやすい。

これが動詞や形容詞・助動詞など、活用を持っている言葉であると、「もしくは」の条件が多くなる。検索用の窓をいくつも用意したのは、このバリエーションに対応するためである。

基本画面 以下の画面への展開の基となる画面

連歌大観

画面1 作品リストへ

画面3 検索
 句検索
 語彙検索
 人名検索

対象指定 ○年代 ○人名

全作品リスト

画面1 絞り込み画面 ⇄ 作品リスト

- ・第一行目に、絞り込みの窓があり、人名（例：宗祇）・年代（例：1400～1500）・場所・目的などによって以下の項目のリストが絞られるようにしたい。
- ・第一行目の指定に従って、画面に右に作品件数が提示され、「画面2」以降の作業の範囲となる。「基本画面」の「対象指定」と同じものが表示される。
- ・各項目 1)～6)が並び、その項目から「画面1-1」が開いて、以下のリストが表示される。
 - 1) 百韻・千句連歌（興行順）
 - ・①見出し（③+⑤）・⑥発句（発句作者も）・②底本
 - 2) 句集・撰集収録作品（成立順）
 - ・句集名・編著者・成立・底本
 - 3) 連歌論・紀行・説話収録作品（成立順）
 - ・題名・編著者・成立・底本
 - 4) 宗祇著、連歌論・紀行
 - ・題名・成立・底本
 - 5) 和歌
 - ・所収歌集名・編著者・成立・底本
 - 6) その他
- ・ジャンルを越えた作品年表もできるようにしたい。

- ・画面・印刷ともに横書き
- ・指定された作品をクリップボードにコピーする機能、要
- ・画面3（検索）のための範囲指定（絞り込み機能）、要

画面1：絞り込み画面

対象指定（絞り込み）		
		件数
1) 百韻・千句連歌（興行順）		件
2) 句集・撰集収録作品（成立順）		件
3) 連歌論・紀行・説話収録作品（成立順）		件
4) 宗祇著、連歌論・紀行		件
5) 和歌		件
6) その他		件
作品リスト	対象指定全作品リスト	検索画面 戻る

- 基本画面から、画面1へ展開したところ。上部に対象指定の欄があり、そこに絞り込みの対象を明示することによって、指定された対象に関しての、現在の収録作品の件数が表示される。
- ここから、それぞれの種別（1）～（6）までを指定することで、該当する収録作品のデータが、作品の成立順に並ぶことになる。

画面1-1：作品リスト

絞り込み	【	】	縮小・閉
絞り込み・追加 コピー 検索へ（画面3） 戻る 印刷 本文（画面2）	成立年	種別	作品見出し
	（* 横書き、縦書きは問わない）		
			スク ロー ル バ ー

- 常に現在絞り込んでいる条件が何か（例えば、作者：宗祇の百韻・千句など）

が明示される様に工夫する必要がある。

- リスト画面の行の削除が可能になるか、指定によるコピーが可能か。
- なお、この表は、作者：宗祇で検索した場合にも、同様の表ができることになり、重複感がある。設計にあたって、検索結果との整合性を考えたい。

画面2 作品本文

- ・「画面1-1」の 作品リストから指定された作品の本文へ展開できる様に設計する。
- ・画面では横書き、印刷は縦書きの形が望ましいが、横書きでもかまわない。
- ・指定された作品をクリップボードにコピーする機能、要

作品名「		」(○の表~○裏)	縮小・閉
前ページ	1	本文・作者名 (同定用作者名) の形	スク ロー ルバ ー
次ページ	2		
ジャンプ	3		
(■句目)	4		
(■折オウ)	5		
解題	6		
	7		
コピー	8		
(範囲指定)	9		
	10		
印刷	11		
	12		
戻る	13		
検索へ	14		
基本画面	15		
画面1			

* この作品本文の画面は、検索結果(画面4)からも出るようにする。

- 本文は、横書きで可。ただし印刷した場合は縦書きの印刷ができるか。あるいは、本文のダウンロードを可能にする。
- 百韻・千句の場合は、基本的に各面(14行)毎に固定した画面が出る様に設計できるか。
- 検索結果画面の場合、検索にヒットした部分が反転するなど見やすくできるか。

画面3 検索画面

・絞り込み機能（「画面1」の各項目を絞る：絞り込み機能を使わないときは、あらかじめ「画面1」で絞り込んだ範囲に対しての全作品対象検索となる）

- ・一句ごとの and or 検索機能（検索項目数は多く確保してほしい）
- ・前句と付句（隣り合う2句）の and or 検索も可能にしてほしい。
- ・3～7句の範囲での and 検索が可能か。
- ・面（14句）折（28句）を間にして and 検索が可能か
- ・5字／7字検索
例：*わたる → 霧わたる、霞わたる、風わたる……など
あさ* → 朝明けに、朝風も、朝夕に、……など
- ・検索文字は、ひらがなで。→検索結果は漢字仮名交じりの本文で
- ・人名検索（同定作業のためのシステムと検索システム）最終的には、人名検索システムとなるが、今後の作業を考えて、人名同定システムを特別機能として残しておく。

検索画面3-1 句検索・語彙検索・付合検索・詞書・散文検索の場合

*基本的には下の表となる。句・語彙・付合・詞書散文で画面をそれぞれ切り替える。

*句検索の場合は、一つの窓に最大7文字（ひらがな）

*語彙検索以下の検索は、一つの窓最大7文字（漢字ひらがな交じり）

検索・句検索 ・ 語彙検索 (句) ・ 付合検索 ・ 詞書 ・ 散文検索 ・ 人名					
<input type="text"/>	or	<input type="text"/>	or	<input type="text"/>	<input type="text"/>
and					
<input type="text"/>		<input type="text"/>		<input type="text"/>	<input type="text"/>
and					
<input type="text"/>		<input type="text"/>		<input type="text"/>	<input type="text"/>
and					
<input type="text"/>		<input type="text"/>		<input type="text"/>	<input type="text"/>
and					
<input type="text"/>		<input type="text"/>		<input type="text"/>	<input type="text"/>
and					
<p>・ 検索 ・ <input type="text"/> 件 (件数) ・ 検索結果へ ・ 戻る</p>					

検索画面3-2

人名検索用

検索・句検索・語彙検索 (句)・付合検索・詞書・散文検索 ・人名

<input type="text"/>	or	<input type="text"/>	or	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
and						
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
and						
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
and						
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
and						
<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>

・検索・ 件 (件数) ・検索結果へ・戻る

画面4 検索結果

以下の形で表示される

なお、下欄の「検索」は、「画面4」に表示されたデータについて再び検索をかける機能

検索式				
種別	見出し	箇所	該当本文 (該当文字反転)	作者名
百韻				

コピー 印刷 本文 検索 戻る (画面3) 基本画面 画面1

箇所：百韻千句の場合→初ウ7……

人名検索用

検索・句検索・語彙検索(句)・付合検索・詞書・散文検索・人名				
<input type="text"/>	or	<input type="text"/>	or	<input type="text"/>
and	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
and	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
and	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
and	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
and	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
・検索・ <input type="text"/> 件 (件数) ・検索結果へ・戻る				

画面4 検索結果

以下の形で表示される

なお、下欄の「検索」は、「画面4」に表示されたデータについて再び検索をかける機能

検索式				
種別	見出し	箇所	該当本文 (該当文字反転)	作者名
百韻				
コピー 印刷 本文 検索 戻る(画面3) 基本画面 画面1				

箇所: 百韻千句の場合→初ウ7…… 句集の場合→分類(秋連歌下など)・番号

● 以上のアウトラインをもとに設計を依頼する。

(宮脇記)

3) その後の作業経過と今後の課題

早稲田システムとの打ち合わせを重ねつつ、後に報告してもらおうシステムができあがるまでに、結局4年を費やすこととなった。それは、一つには、我々のイメージの本になっている連歌の付合の感覚を、システム開発の方に伝えることの難しさでもあったといつてよい。とはいえ、システム開発の担当者はきわめてよく勉強してくれたし、疑問を提出してくれたことで、こちらも曖昧にしていた問題に立ち返ることができ、きわめて有意義であった。

この間、綿抜・廣木を中心とする資料の翻刻、データ入力チームは、先に示したデータ票にかなりの分量を入力していった。その詳細は、後掲の「システム説明」において触れられるであろう。宗祇の連歌60巻と、句集の翻刻は、早めに終えられたが、その歴史的仮名遣いによる統一、漢字表記の統一の問題などは、いかに統一するかという作業手順の問題であったが、最後まで問題となったのは、人名の同定作業であった。

一人の作者が、一字名から始まって、さまざまに登場してくる作品群にあつて、統一のためには、全人名データにもとづいての統一が大きく問題となる。システム開発の遅れが祟り、こうした入力データの処理が遅れ、結局人名の同定は終えられていない。

他の伝本で調査すべきものもお多く、残された課題はけっして少なくない。だが、今後の作業の母体となるデータベースのシステムができあがったことをもって、一応の報告としたい。

(官脇真彦)